

文斗毒ニノス

NO. 2

19416 全学共闘会議
文学部闘争委員会

全立命の学友諸君と、とりわけ新入生諸君と、文学部斗争委員会「文斗毒ニノス」を諸君に送り、我々の斗争の永続的展開を希望し、熟けていくことを明らかにしておきたい。私々は既に衣笠に於る入学式紛争斗争で配布してあるが、衣笠路に於るオチ一号として、初めに我々の基本的な主張をここで述べておきたいと思う。

我々は立命館大学に於る学生としての自己、^{存在}を振り返る時、大学というものの現実的実態を、生々しく実証的に捉えて行かざるを得ない。我々の斗争とは限りなく、又立命館に於る教学体制事情にも限りなく、まさに空疎化され、死語の羅列と化した知識の切り売りの端として、か殺業ははく、四年という

期間設定は、既合理化されたワンライクルの形式でしかない。ビビッドな知的創造の保障は全くなく、実に「理性の舟」の全内容としてそれが当り前のよう形勢である。新入生諸君も、君等が若頃のうちに過した高校生生活を総括するならば、何故に我々がこのようなことを他に對しても語らねばならぬかを理解出来るだろう。学生とは言いながら、我々は設定されたスケジュールやプログラムを消化して行く中で、明らかに将来の物力の商品化の予備軍として予め位置付けられており、形式的日常性と停滞した意識状況の中に強制的に規定付けられている。学生は成程小ブル的存在であるが、学生たるが故に「言知的欲望」を、我々はもつと木根に語り、これを實現すべき保障を勝ち獲らねばならない。立命館斗争への我々の行動の一端は、かくの如き感性的次元での、大学に對する否定であり、学生あるいは人間としてより真実でありたいという要求を根底に置くこと好しに斗争姿勢は存在し得ない。その意味で立命館に於る現在の日常意識状況をハッキリと識に捉えて、我々は斗いを組んで行くであろう。即ち民権論者ばかりの「啓蒙」ではなく、我々は「啓蒙」という形で諸君に斬り込みをかけてやう。

う。スケジュールやプログラムをそれ自身として受容するのではなく、現行大学の真面目であるそれらの秩序を根底的に否定して行く立場こそ、我々のオチ一の立場である。

感性的次元での把握を理論化するならば、我々は大学の社会的な位置をも、歴史的に捉えて行かざるを得ない。ブルジョアの秩序の一面に於り、その秩序の再生産に組み込まれた現行大学は、決して「大学の自治」、^{大学}の自由とを語らう所ではありえない。

日本帝国主义の復活蓋化に於り、不可欠な産業の再編成に相成り、大学の帝国主義的再生産は、とりわけ近年以降に顕在化し、産業の振興と再生産を保障するものとしての「人的資源の開発」とを名目に、大学の新質、設備投資の拡大、急速なマスプロ化が進められた。いわゆる學目斗争の敵意は、亦、右背景を以て近年以降に現れた大学内矛盾の露呈を基礎に敷いている。日帝は「日韓条約」SPACLなごによる対外進出の促進と、自由化はごへの対策によつて、一層産業回、公共企業面(以口録)に於る合理化としての再編を強行するであらう。それに規制される大学は、決してそれ自体の存在に於て口定化したり独立したりすることはありえず、歴史的存在として、同時に全社会体による拘束を受けらるゝのである。現時点に於ては明確に産業回回を以て象徴的拘束を受けらるゝことによつてその社会性を全うし、我々学生を知的欲望から疎外せざらぬが、但別弁内領域に押し込められてゐる。我々はこゝろ「客観的」な大学の位置を何別弁内領域の周辺として受け止め、学生を管理、支配する最もスマートで近代的形式である立命館体制に、バリエードの内なる我々の理解された大学を打倒せしめて斗争を展開して行くであらう。

全ての学友諸君と文斗毒は告ぐ、共に決志せよ。学友会員は有にふる恵つた批評と申傷に感ずることなく、立命館大学闘争の斗いを継続化せよ。